

# 上原 美術館 通信

No.  
**28**

編集・発行 公益財団法人上原美術館  
2024年12月26日発行(季刊年4回発行)  
公益財団法人 上原美術館  
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341  
Tel. 0558-28-1228  
[www.uehara-museum.or.jp](http://www.uehara-museum.or.jp)



上原コレクションの特徴は、個人コレクション特有のやさしさ、穏やかさにあります。見ていてほっとするそれらの絵は、生活をやさしく彩ります。今回の上原コレクション名品選では、新たに収蔵した安井曾太郎《庭の雪》を中心に、あわい光とやわらかな色彩による絵画をご紹介します。



安井曾太郎《庭の雪》1937(昭和12)年 ※新収蔵・初公開

安井曾太郎《庭の雪》は、木々の間に冬の気配が広がる風景画です。あわい光は木々や地面に積もった雪に反射して、画面全体を穏やかに照らし出します。雪に落ちる影は、緑がかかった灰色、ピンクがかかった灰色など、やわらかな色彩によって複雑なニュアンスを生み出しています。緑や黄土色などの中間色はわずかに置かれた黒と対比されることで、雪の白を息づかせています。枝の間から空を見上げると、滲むような光が広がり、静かな画面に冬の冷たい空気が満ちるかのようです。安井が本作を描いたのは、フランスから帰国後の長いスランプを経て自らの様式を生み出した時代でした。色彩を並べ置いて空間を生み出すその構成はセザンヌを想起させますが、あわい光とやわらかな色彩は安井独自のリアリズムを感じさせます。

アルベール・マルケは、鮮やかな色彩を用いるマティスと親しく交流しましたが、自らは一貫して穏やかな色調の絵を描きました。《冬のバリ(ボン・ヌフ)》は最晩年に描いたパリの眺めです。冬の曇天に広がる鈍い光は雪景色のパリをぼんやりと浮かび上がらせます。セーヌ川の向こうには、アール・ヌーヴォー様式の特徴的な形をした百貨店サマリ

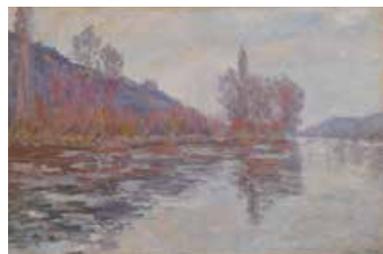
テーヌがうっすらと見えます(長年閉館していたサマリテーヌは近年、日本の建築家ユニットSANAAによってリニューアルしました)。冷たい大気は灰色がかかった緑であらわされ、道路や建物は薄茶色などであらわされています。やわらかな中間色とそのトーンだけで描き出すその風景は、どこか水墨画のような気配を漂わせています。

モネは、それまで白から黒のグラデーションで描くことが一般的であった光と影を、徹底して色彩へと置き換えた画家です。《ジヴェルニー付近のセーヌ川》は、モネが暮らすジヴェルニーの対岸ポール=ヴィレ付近から描いた3点の連作のうちの一つで、時間によって移り変わる光をやわらかな色彩で捉えました。紫や青灰色、緑など、一つひとつの色彩の彩度(鮮やかさや強さ)は高くありませんが、画面から離れて全体を見ると、川面に反射するあわい光が浮かび上がります。

本展ではそのほか、ノルマンディーの柔らかな夏の光を中間色と灰色で描き出すマティス《エトルタ断崖》、にぶい光の中に紅白の花が浮かび上がる須田国太郎《牡丹》、桜島と錦江湾が曙の光に浮かび上がる梅原龍三郎《朝暉》など、あわい光とやわらかな色彩による絵画を上原コレクションよりご紹介します。穏やかでやさしい上原コレクションの魅力をどうぞお楽しみください。(土森)



アルベール・マルケ《冬のバリ(ボン・ヌフ)》1947年頃



クロード・モネ《ジヴェルニー付近のセーヌ川》1894年

弘法大師の生涯を描いた絵巻物の断簡。ふっくらとした体にずっと天地を指す誕生仏。塔の中にみほとけの言葉が書かれたお経の一部。小さいながらも、大切に伝えられてきた作品は今も数多く遺されています。本展では、新収蔵・初公開となる《高野大師行状図画断簡》(紙本着色・鎌倉～南北朝時代)を中心に、上原コレクションから小さくも愛らしい仏教美術をご紹介します。

《高野大師行状図画断簡》は、真言宗の祖、弘法大師・空海の生涯を伝える絵巻物の一部分です。二人の対面する僧侶が描かれた本作は、中国・唐に留学中の空海のエピソードが描かれています。留学した空海は、当時、密教の第一人者であり、多くの弟子を持つ恵果阿闍梨に師事しました。ある時、恵果の弟子、珍賀が空海を誹謗します。しかしその夜、珍賀の夢に四天王が現れ、空海を誹謗したことを責めたため、翌朝、慌てて謝罪をしました。画面には建物の中に座す空海、庭でひれ伏し謝る珍賀の姿が描かれています。切り取られた絵巻物の一片にはゆたかな物語が広がります。

《誕生仏》(銅造・鎌倉時代)も本展で初公開となる作品です。釈迦が生まれた姿をうつしとった誕生仏は、ふっくらとした小さな体で天地を指さしています。20cmに満たない大きさの像ですが、微笑する口からは今にも「天上天下唯我独尊」と言葉を発しそうです。

《善財童子絵断簡》(南北朝時代)は、『華嚴経』の「入法界品」



《高野大師行状図画断簡》紙本着色 鎌倉～南北朝時代 ※新収蔵・初公開

に登場する善財童子の求道の旅を描いた絵巻物の一部分。仏の道を志す善財童子が53人の善知識(仏道修行を導く者)を尋ねて、さまざまな旅をする物語です。本作は、第34番目、善知衆芸童子に教えを請う善財童子を描いた部分です。30cm四方ほどの画面に、柔らかな筆致で描かれた二人の童子からは、穏やかな問答の様子が伝わってきます。

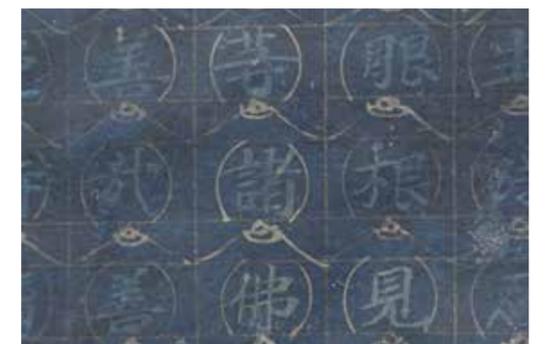
本展では、塔の中に一文字ずつ法華経の文字を書き入れた《一字宝塔法華経》(長寛元[1163]年)、念持仏を思わせる大きさの《大日如来像》(文永7[1270]年)など、小さいながらも愛らしい作品を展示いたします。手元にそっとな置いて、対面したくなるような仏教美術の数々をお楽しみください。(櫻井)



《誕生仏》銅造 鎌倉時代 ※新収蔵・初公開



《善財童子絵断簡》紙本着色 南北朝時代



《一字宝塔法華経》紺紙銀字 長寛元(1163)年

光を色彩に置き換えようと試みたモネは、1890年頃から微細な光の変化を捉えるため、同じ風景を異なる時間で描く「連作」に取り組みます。《ジヴェルニー付近のセーヌ川》(図1)もそうした作品の一つです。

モネは1883年4月、パリから70kmほど離れたセーヌ川近くのジヴェルニーに移り住みます。本作はその対岸ポール=ヴィレから下流を見た眺めです。ポール=ヴィレの傍にはなだらかな丘があり、本作の左側にもその斜面が描かれています。川岸には草木が茂り、画面中央右にある木々の塊の中からセイヨウハコヤナギが高く背を伸ばし、その姿が中央に水平線を取る安定的な構図に抑揚をもたらしています。

モネはこの風景をほぼ同じ構図で3点描き、そこからやや右に構図を取った作品を2点、さらに右にずれた構図を2点描きました。そのいくつかには「夕暮れの効果」、「バラ色の効果」など

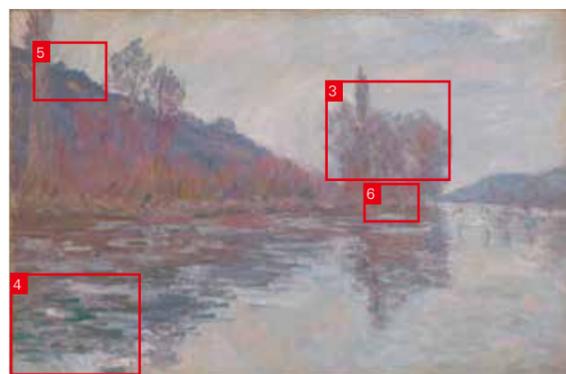


図1 クロード・モネ《ジヴェルニー付近のセーヌ川》1894年 油彩・カンヴァス 53.0×80.5 cm



図2 近赤外線画像

のタイトルが付けられています。本作の季節や時間は分かりませんが、薄曇りの空にはやわらかな光が広がります。画面全体は紫や青灰色など同系統の色が主調色となっています(モネは自らが使う絵具について1905年の手紙で「鉛白、カドミウム・イエロー、ヴァーミリオン、マダーレーキ・ディープ、コバルトブルー、ヴィリジアン、それが全てだ」と述べています[Ashok Roy, 'Monet's Palette in the Twentieth Century', *National Gallery Technical Bulletin*, Vol. 28, 2007])。特に中景の繁みは紫と青灰色が湧きたつような細かいタッチで塗られ、あわい光が乱反射するかのようです(図3)。近赤外線画像で見ると、繁みとその反映は右外側で絵具が厚く塗られ、それらが画面中央に大きな円を描き、左の空はそれに呼応したタッチで描かれています(図2)。

丘が映る画面左下の水面を見ると、平筆によると思われる横長のタッチが大胆に置かれています(図4)。そこには緑が用

いられており、暗部が色彩そのものであらわされていることがわかります。また、よく見ると画面左上の稜線近くにも青灰色の下に緑が施されており、山影が鈍く輝きます(図5)。

画面中央に走る水平線とその河岸にも緑がわずかに配されていま

す。そして、中央の繁み下の暗い部分には、緑とともに鮮やかな黄や青が繊細に、そして伸びやかに塗られています(図6)。それらは拡大すると、現代の画家ゲルハルト・リヒターのアブストラクト・ペインティングのように色彩そのものが表現となっており、モネがその後

の画家に与えた影響が想起されます。

当館では今年10月、株式会社サビアによる絵画の高精細スキャンを実施。今回、モネによる光の表現を1,000dpiの高精細スキャンと近赤外線スキャン、2種類の画像から読み解きました。2023年に改正された博物館法には、ミュージアムの役割として「デジタルアーカイブの作成」が明記されています。当館では今後もデジタルデータの作成とその研究を通じてコレクションの魅力を見出し、再発見していきたいと考えています。



図3



図4



図5



図6

上原美術館は令和元(2019)年10月28日、みしまのお寺めぐりの会の依頼により、三島市安久地区にある長福寺を調査。3体の平安仏を見出しました。

このうち薬師如来像は長福寺本尊で、像高161.1cm。頭頂から角柱形の足柄までのほぼ全容を針葉樹の一材で造る一木造りで、両手首先と両足先を別に造って寄せています。また背面に短冊形に窓を開けて干割れ防止のための内剝りを行い、背板でふさいでいます。次に如来形像は像高147.2cm。構造は薬

師如来像と同じで、面貌も似ています。最後に十一面観音像は像高151.6cm。両足裏に取り付けた二本の足柄を台座上の穴に差し込んで立てていますが、現在の両足は後補で、当初は他の像と同じく、頭頂から角柱状の足柄までを一材で造る構造だったようです。いずれの像も、等身大の像を足柄までを含めて一木造りとする構造、面貌などが古様ですが、浅く形式化した衣文、薄い体軀、薬師像の丸く高く盛り上がる肉髻などは時代が下る要素で、11世紀の

像と考えられます。

本像については、伊豆の地誌『増訂伊豆志稿』が行基作と記すほかは(事実ではありません)、文献からは何もわかりません。一方、長福寺の立地に注目すると、安久地区は天城連峰を水源とし、肥沃な田方平野を潤す狩野川と、古代、伊豆国府や国分寺があった三島の中央部を貫通する大場川の合流地点。近隣には奈良から平安時代の箱根田遺跡があり、官衙や倉庫と思われる大型掘立柱建築の痕跡が確認されています。出土遺物の中には、儀式に用いる人の顔を描いた人面墨書土器もあり、特に僧、あるいは地藏菩薩と思われる顔が描かれた土器が注目されます。長福寺の仏像はこの遺跡と関連する像でしょう。

三島市最古の仏像と考えられる長福寺の3体の平安仏は、令和7(2025)年1月13日まで開催中の特別展「仏像でみる伊豆の平安時代」で初公開されています。



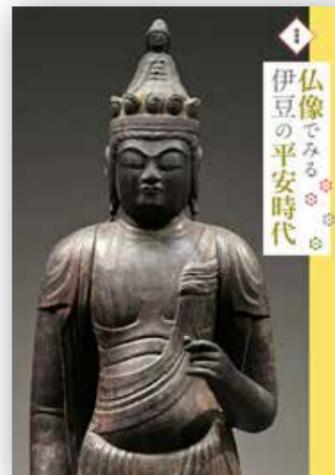
### 図録「仏像でみる伊豆の平安時代」刊行のお知らせ

現在開催中の特別展「仏像でみる伊豆の平安時代」の図録を刊行いたしました。A4判104ページ、写真ページはカラー。170点を超える画像で、特別展に出展された全ての仏像の詳細なお姿、造形をご覧いただけます。巻頭には伊豆半島に伝わる平安時代の仏像の概要を解説した論考「伊豆の平安仏」を掲載。巻末に詳細な作品解説もあります。ぜひ一読ください。

#### 購入方法

図録の販売価格は1200円。美術館受付でお求めいただけるほか、現金書留での販売もしております。ご希望の方は、氏名、ご住所、電話番号、ご希望のカタログ名(仏像でみる伊豆の平安時代)、冊数、金額をご記入のうえ、図録代金1200円のみお送りください。送料は無料です。

送付先: 上原美術館 〒413-0715 下田市宇土金341番地



ギャラリートーク(作品解説)

開催中の展覧会内容について、学芸員が解説を行いました。  
 展覧会会期中は毎月第3土曜日、近代館は10時より、仏教館は11時より開催しています。  
 開催時間になりましたら、各展示室へお集まりください。  
 ※要入館券、詳細は当館ホームページ、公式SNS等をご覧ください。

授業入館

10月24日・25日 下田市立下田中学校職場体験  
 10月26日 下田書道会  
 10月27日 下田市立下田中学校美術部  
 11月14日 南伊豆町立南伊豆中学校  
 11月28日・12月3日・4日 下田市立下田中学校  
 11月29日 下田市立下田小学校

中学生は主に京都・奈良方面の修学旅行の事前学習として、仏像の見分け方を学芸員が解説しました。下田小学校はアートカードを使ったゲームや作品鑑賞を行いました。

出張授業

9月12日 下田市立大賀茂小学校  
 9月17日 下田市立白浜小学校

小学校では鎌倉方面の修学旅行の事前学習、岩絵具を使った日本画体験などの出張授業を学芸員が行いました。

対外活動

10月28日・11月25日 静岡大学東部サテライト連続講座  
 11月 4日 河津町谷津・南禅寺仏像群国指定重要文化財指定記念講演  
 11月 9日 南伊豆町史通史編(上)刊行記念講演  
 11月26日 下田市史講座  
 12月 5日 富士市立西図書館講座  
 12月22日 みしまのお寺めぐりの会 300回記念講演

田島上席学芸員が上記の講演を行いました。静岡大学連続講座は伊豆半島ジオパークにちなんだ伊豆の仏像についてお話ししました。河津町では、2024年に国指定重要文化財に指定された谷津・南禅寺の仏像群について記念講演を行いました。

調査活動

11月11日 伊豆の国市寺院調査

番組収録

伊豆の魅力を発信するテレビ番組『いい伊豆みつけた』(伊豆急ケーブルネットワーク制作)の「伊豆縦貫道のその先へ…」(リポーター久保沙里菜さん)の回で、当館が紹介されました(テレビ埼玉:11月14日、テレビ神奈川・千葉テレビ:11月15日放映)。番組放映後はYouTubeでもご覧いただけます。また地元ケーブルテレビ局(下田有線テレビ放送株式会社、小林テレビ設備有限公司)で展覧会の番組収録を行いました。



ギャラリートーク 近代館



ギャラリートーク 仏教館



授業入館 下田中学校美術部



出張授業 白浜小学校



対外活動 南禅寺記念講演



番組収録 「いい伊豆みつけた」

当館の日本画教室講師・牧野伸英先生を講師にお招きした2つのワークショップを11月に開催しました。

講師: 牧野伸英先生(日本画家/当館日本画教室講師)  
 場所: 当館アトリエ

● 「おとなの日本画体験」 11月2日(土)

11月2日、『おとなの日本画体験』を開催しました。年に1回開催しているこちらのワークショップは、日本画を多くの方に知っていただく普及活動の一環として実施しています。この体験を通じて、「本格的な日本画に取り組みたい!」と日本画教室を受講する方も多くいらっしゃいます。今回は11名の参加者に日本画を体験していただきました。

体験では寸松庵という小さい色紙に、日本画の画材である岩絵具や膠を使用して、作品を描いていただきました。参考作品として、牧野先生が描きおろしして下さった作品(夜桜の風景/花[デンドロビウム])2点をみながら、制作手順を牧野先生から説明いただきました。参加者は、先生の下図を写して描いたり、写真を参考にオリジナル作品を制作したり、各自好きな題材を黙々と制作していきます。初めて扱う岩絵具や膠の分量に苦戦される方もいましたが、牧野先生の丁寧な指導のおかげで、徐々に岩絵具の扱いに慣れていきました。最初は緊張して慎重に制作していた参加者ですが、慣れてくると参加者同士で会話を楽しみながら、制作に励む姿が見られました。今回、日本画に触れた経験が、これから参加者が日本画をみる機会や、深く知るきっかけとなりましたら嬉しいです。(土屋)

● 「ピカピカ金の箔でお絵描き!」 11月3日(日)

11月3日の文化の日に、こども向けの日本画体験ワークショップ『ピカピカ金の箔でお絵描き!』を開催しました。ワークショップには6歳のこどもからおとなまでの計18名、7組のご家族が集まりました。

ワークショップでは日本画家の牧野伸英先生のご指導のもと、古くより日本画で扱われている画材を用いて制作体験を行いました。作品を描く紙には寸松庵色紙を、描く画材には顔料絵具や金色の箔を使います。真鍮を約0.003mmまで薄く伸ばして作られる真鍮箔は、人の息で簡単に吹き飛んでしまうほど繊細な画材です。丁寧な手付きで箔を貼り付ける参加者のまなざしは職人のようでした。今回は全員が日本画に初挑戦の参加者でしたが、ご家族同士で「これ、どうやったの?!」とコミュニケーションを図りながら、和気あいあいと制作されていました。完成作品には、金色の箔のピカピカと輝く特徴を生かしたクリスマスのモチーフや、宇宙の星々を描いた力作が並びました。

今回の日本画体験を通し、参加者は日本の伝統的な和色の鮮やかさや豊かさ、金色の箔の美しさを体感して下さっていたように思います。今後もより多くの方に体験を通じて日本画の魅力に触れていただけるよう、ワークショップを企画したいと思います。(丸山)



アンケートの声

- プロの先生に日本画の描き方を直々に指導してもらえてうれしかったです。
- 初めての日本画でした。とても親切に教えていただいたので、また、やってみたいなあと感じました。
- 楽しく体験させていただきました。



アンケートの声

- きんをはがすところがたのしかった。(5歳)
- 金の箔をはったり絵の具を使ったりいろいろなことができたのでとても楽しかったです。またやりたいです。(9歳)
- 絵を描く機会がないのでとまどいましたが、説明を聞いていにして下さり親子で楽しい時間を過ごすことが出来ました。(保護者)

## 伊豆だより



向陽寺の達磨大師堂

暑かった季節もやっと過ぎ、11月中旬から伊豆も寒さが感じられる日が増えてきました。毎年、1月になると美術館に隣接する向陽寺の達磨大師を祀るお堂へと、初詣に訪れる人を見かけます。昔の写真を紐解いてみると、達磨大師堂は昭和56(1981)年に建立、美術館よりも2年先輩になる建物です。美術館も下田の地に建て40年以上となりますが、達磨大師も長く地域に親しまれてきたことがうかがえます。お堂の建つ高台から一望できる稲梓ののどかな里山は、昔と大きくは変わらず、ほっと一息つける風景です。(櫻井)

## 令和7(2025)年度 教室受講生募集

上原美術館では令和7(2025)年4月からの教室受講生を募集しています。

### 日本画教室

講師 牧野伸英先生(日本画家、日本美術院特待)

日時 毎月第2・4火曜日 13:00~16:00

### デッサン・水彩画教室

講師 小野憲一先生(現代美術作家)

日時 毎月第2・4水曜日 13:00~16:00

### 仏像彫刻教室

講師 岩松拾文先生・大谷文進先生(仏像彫刻家)

日時 毎月第3日曜日 13:00~15:30

### 写経教室

講師 山田修也先生(書家、毎日書道展審査委員)

日時 毎月第2日曜日 13:00~15:30

### 仏教美術講座

講師 当館学芸員(交代)

日時 毎月第2日曜日 10:00~11:00

会場 上原美術館アトリエ(各教室とも)

受講料 無料(用材、写生会の施設入場料等は実費負担)

募集人数 各教室とも若干名、仏教美術講座のみ20名  
(応募者多数の場合は抽選)

受講条件 全日程参加できる方、ご自分で通える方  
(お1人1教室のみ応募可) ※初心者歓迎

応募方法 ①氏名、②年齢、③住所、④電話番号、⑤ご希望の教室名、⑥経験の有無を明記の上、郵便ハガキもしくはEメールにてご応募ください。申し込み締め切りは2025年2月28日(必着)です。美術館受付でもお受けいたします。なお応募結果は3月10日頃、応募者全員に郵送で通知いたします。

お申込み先 〒413-0715 静岡県下田市宇土金341  
上原美術館「教室募集」係

Eメール info@uehara-museum.or.jp

※Eメールでお申込みの方は、お申込み受付メールを返信いたします。メール送信後、3日以内に受付メールが届かない方はお手数ですがご連絡ください。

次回休館日は2025年1月14日(火)~1月24日(金)です。(展示替えのため)



上原美術館  
Uehara Museum of Art

開館時間  
9:30~16:30  
最終入館は16:00まで

休館日  
展覧会会期中は無休  
展示替え日のみ休館

入館料  
大人/1,000円、学生/500円  
高校生以下無料 \*団体10名以上は10%割引

表紙写真: クロード・モネ《ジヴェルニー付近のセーヌ川》。展覧会『あわいひかり やわらかないろ』に出品予定です。